

夕立屋（江戸小咄から）

- 団 暑いねえ、こういう暑い日には、一雨ざーっと来てくれるとありがたいんだけどなあ。
- 団 えー、夕立屋夕立、えータ立屋夕立。
- 団 なんだい、あの夕立屋ってのは。雨を降らそうってのかな、面白い。、呼んでみよう。
おおーい、夕立屋。
- 団 へい、毎度ありがとうございます。
- 団 お前さん、夕立屋ってえくらいだから、雨を降らせるのかい？
- 団 へえ、さようでございます。
- 団 で、いくらなんだい。
- 団 へえ、これはもうほんのおこころざし程度で結構でございます。
- 団 そうかい、じゃさっそく、三百文ほど降らしてもらおうか。
- 団 へい、かしこまりました。

なんてんで、男はしばらく呪文を唱えておりましたが、やがて雨がざーっと降ってまいりまして・・・

- 団 おかげで涼しくなったよ。だけど、こうして雨を自由に降らせたり、止ませたりできるなんて、お前さん、ただの人間じゃないね。
- 団 へい、実はわたくしは、空の上に住んでおります、龍（たつ）、でございます。
- 団 なるほど、道理で不思議な術を知ってなさる。だけどね、お前さん。夏暑い時は、こうしてお前さんが、雨を降らしていれば商売になるけど、冬、寒くなったら、商売はどうするんだい。
- 団 へえ、寒くなりましたら、体の子龍（炬燵）をよこします。